

第4章 tough 「タフ」であるために

1999年W杯の唯一の収穫は、日本代表キャプテンだったマコーミックの、敗因は「サイズではなくタフ」という言葉です。プロ化と natural instinctive という言葉までが使われ出した展開・継続のレベルとスピードに取り残されてしまった日本のラグビーに与えた言葉ですが、簡単に聞き流されてしまって、反省が生かされないままに2000年が過ぎました。タフという言葉は身体が強いといった単純な意味にとられてしまったからでしょう。

身体の接触があり、広いフィールドを走り回るラグビーは、激しい競技です。そこでは身体的能力が競技に大きく影響します。しかも、競技時間が長いということは、体力の大小だけでなく、長時間にわたる持続力が大きな要素になります。身体のサイズは有効要素ですが、絶対要素ではありません。身体が大きくて、走るのが速くて、敏捷で、運動神経が優れていても、ゲームの先を読む力や判断力が劣れば運動量が減ります。また、相当な力の差があれば別ですが、試合中いつも機先を制することができるとは限りません。ですから機先を制されたとき、どう耐え、どう切り返すかが同等に重要な問題です。

タフ(tough)は「強靱な」という意味ですが、曲げても折れないとか粘り強いという内容の言葉です。active な粘り強さと、passive な粘り強さの波を乗り越える強さである。イコールコンディションを原点とするラグビーは、active と passive が半々という認識が基本にあり、忍耐の強さがゲームの密度を増していきます。一時的な活発さや華やかさだけでは全うできません。プレーの激しさに加えて、有効・フレキシブルな中身あるものにする意識と練習が肝要です。

タフである内容は、体力的と、精神的に分けられます。体力的という場合、体格がよく筋力が強いというだけでなく、個々の動きは勿論のこと、組織的に動き続けることができることをいいます。例えばボールを持っているプレーヤーも、タックルするプレーヤーも当り方がある。当たる角度、高さ、腕の使い方、更には当たった後ボールをどう生かすか等々考えなくてはならないことが多いのです。そして、チームメイトがそのコンタクトプレーをどのようにサポートするかということによって、展開・継続が決まってくるのです。

精神的にいう場合、精神力とは単発的な「やるぞ!」という「気合」ではなく、不屈の闘志を持ち続けることをいいます。もっとも重要なことは、闘志の持続であって、いかなる状況にあっても、自己をコントロールして、挑戦し続けるかがタフであることの条件です。タフであるためには精神的な要素の割合が非常に大きいのです。

ゲームの流れを漠然と見れば、単純な活動的攻撃が主体のようですが、active (活動的・能動的)な動きと、passive (受動的)な動きから成り立っています。競技の進行過程の半分は passive なものであるという認識が重要です。ラグビーの原点であるイコールコンディションからの攻防に、双方平等の前提があり、ルールの歴史が物語るように、ラグビー精神は外見的な敢闘精神以上に、忍耐精神の重要性を包含しているのです。双方に能動的攻撃の機会が同等で、前進活動は攻撃の起点であるが万能ではなく、横展開があって前進行動が生きてくるものです。

防御における pressure は能動行為という側面をもっています。ゲインラインとタックルラインの理論の導入によって、前で止めることを目指すようになりましたが、防御を規制する off-side line 設定に合わせて、ボールを獲得した側の展開余裕を確保することを意図されています。攻撃の芽を積む行為は、戦う方法としては有利であることは認識できますが、全面的に肯定していないのです。しかし、防御はゲインラインを越えて圧力をかけていくものでもあるのです。これがイコールコンディションの基本理念なのです。

ラグビーゲームにおける受身とは相手の攻撃を堪え忍ぶことだけではないのです。耐え忍んでからの返し技を含んでいるのです。タックルという aggressive というのは、攻撃的タックルではなく、攻撃を食い止め、反対に味方の攻撃へすりかえる巧みさを指しています。また、味

方の後方へ大きく蹴り込まれた場合は、相手の攻撃が途切れたチャンスと考え、防御に戻ったメンバーで相手の状況を判断して、反撃を敢行することが可能になり、蹴り込んだ相手は瞬時に、能動から受身にまわってしまうのです。

平素から攻撃だけでなく、防御=反撃を考えていなければなりません。試合は双方半々の割合で相手の攻撃があると想定するのが基本です。ルールはイコールコンディションを確保し、双方同等であるようにしてあります。反撃の原動力は、信念を持ちあきらめないことです。相手の攻撃をしっかり、即ちダメージを少なく受け止め、流れを生かして、逆にこちらの利点として反撃に転じる心がけが大切であって、攻撃方法を常にイメージしていなくてはならないのです。忍耐は攻撃の母である。相手の攻撃はいつか切れる（味方が切ってくれる）。そのときに直ちにカウンターアタックできるように心と身体の準備をしていなくては、成功しないのです。一転反撃できるインターセプトは偶然のものではなく、狙うべきものです。準備として執拗なプレッシャーをかけミス誘うのは、受身のプラス志向で、弱点を突くために、弱点を見抜くかどうか勝負のひとつであり、激しさのひとつの要素です。人間としての思いやりと、勝負での冷酷さは別次元のものである。

相手の攻撃への返し技は武道の受身の一つです。さらには相手の力を利用して勝つことも有効な手段である。慌てさせたり、迷わせて判断を誤らせたり、相手に食い違いを起こさせ、内部分裂を誘発するのも有効です。防御本能を逆手にとるとか、戦闘意欲をなくさせるほどやつつけるのも、能動的手段の一つです。それには、試合前に絶対勝つと決起するよりも、平素の練習で、攻撃を受ける段階から反撃に移るパターンを重視することが必要です。

試合前の掛け声も、「絶対に勝とう」ではなく、「負けない」に重点を置けば、過度で無用の荒々しさが消え、足が地について着実にプレーできるものです。戦術家がいう Defense Rugby とは守るラグビーではなくて、守ることに専念する中で、相手のミスを引き出し、turn over = 寝返りの機会を待ち、生かして反転する負けないラグビーをいうのです。

TOUGH とは、ただ力が強いことを言うのではない。powerful and passive ; 忍耐強く、打たれ強く、粘り強い受身から、激しく反撃する不屈のしたたかさをいうのです。「辛い」という文字の頭に横棒の一を足せば、「幸」という字になるのだと自分に言い聞かせるのも一つの励みとなるでしょう。タフであるために、常にハングリーであり、辛いことを果敢に追求するプレーヤーでなければなりません。